

---

# かわいい PET

momochan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かわいい P E T

### 【Nコード】

N 4 9 6 4 D

### 【作者名】

m o m o c h a n

### 【あらすじ】

前作「アシンメトリー」に続く私の恋愛の軌跡を文章にしてみました（\*―\*）前回読んで下さった方がまた共感してくれる物にしたいです。

## 前兆

この話はアシンメトリーのその後のお話になっています。

ミク22歳の春、専門学校を卒業したミクは、クラスメートだったトオルと付き合っていた。

トオルは優しくて今時珍しい真面目な男だった。  
わがままを聞いてくれるトオルの傍は居心地が良かった。

デザイナーの彼と、絵が好きなミクは一緒にいるだけでいつも楽しく、一緒にご飯を作ったり、絵を描いたりして暮らしていた。

このまま結婚して、子供を産んで平和に暮らすのも悪くない。

なんだか男運がないせいかミクはだんだん結婚を意識しはじめていた。

トオルの事は恋愛対象というより、旦那だと思っていた。

…しかし

トオルは言った。

「結婚？そんな先の事よくわかんないよ」

…は？

ミクはトオルと別れる事にした。

ただ、今よりも幸せになりたいってその時は思った。ミクは探していた、自分とずっと一緒に居てくれる相手を。

彼の事は全然嫌いじゃない。だけど平行線な毎日がただ続いていくのが怖くなったのだ。

そしてミクは一人になったのです。

## 友情から恋愛へ

トオルと別れたその足で、ミクは大樹の家に向かった…

大樹とはいわゆる幼なじみ。大樹は遊び人だったけど、ミクを可愛がってくれて簡単に慰めてくれる大樹の事はとても好きだったから。

「私の3年間何だったのかなあ…」

彼氏と別れた事を報告した。大樹はゲームをしていてあまり真剣に聞いていなかった。

「しょうがないだろ。自分が決めた事なんだから。」

そう言うと、ミクの頭をポンポンと軽く叩いて、隣に寄り添った。

ミクはこのお手軽な優しさに弱かった…。

「呑みにでもいきますか？」

車の鍵を指に引っかけてぐるぐる回しながら大樹は言った。

今思えば、ミクはただ大樹に甘えたかっただけなのかもしれない。

その夜、酒を呑んでへろへろになったミクは大樹と手を繋いで歩いていた…

公園には誰も居なくて、星が良く見えて、いかにも何かが始まりそうな雰囲気だった。

「俺、お前が彼氏と別れると思わなかった。何だか俺が最後に一緒になる相手はお前なんじゃないかなって思う。俺と結婚しよう。」

大樹の言葉にミクは息を飲んだ。

今まで夢のように憧れた言葉を大樹はさらりと言った。

…そしてミクも大樹を意識しはじめた。

こうしてミクと大樹はいきなり付き合う事に…

今まで大樹が誰と遊ぶのが、どんな恋をしていよが、関係ないと思っていたのに、不思議な事に二人は物の3日で恋仲になってしまったのです。

普通に考えたらおかしい話なのに、何故だかその展開に運命のような物を感じてしまったのでした。

しかし…

結局大樹の女癖はなおらなかった…連絡が取れなくなり、他の女と会っている事人づてに聞いた。

シカトに喧嘩！

今までのミクの恋愛にはなかった、様々なトラブルにより、二人は数か月で破局。

そしてミクは思ったのです…（私は男を美化しすぎなのかもしれない、真面目に、ただ信用して付き合っているなんて本当は危険なのかもしれない）

確かにミクの価値観は変化した。

どうせ好きになったって、自分が思う程男は愛してくれないのよ、信じて裏切られたりがっかりするくらいなら、いっそ遊んでた方がいい！

そうしてミクは大樹へ連絡するのをやめ、コンパに行きまくったり、寂しさを紛らわす為、ひたすらふらふらしていた。

好きな時に好きな男の子を呼んでは、ご飯を食べたり、ドライブしたりした。

周りの女友達も一緒になっでは遊んで過ごした。

だんだんそんな日々が楽しくなってきた。

今まで真面目にやってきたのが馬鹿らしくすらなつた。  
ずっとこんなんでもいいやあ

どんどん適当になつていったミクは、もう二度と恋はしないかも、  
、…そう思った。

…そして、彼と出会つた。その時のミクは、まさか自分が彼を好き  
になるとは予想していなかつた。

## 始まり

彼との出会いはあまりにも予想外なところからやって来た。

ある時、エステ時代の同僚マコから結婚の報告があった。

マコは綺麗で美人でミクとは全く別のタイプだったけど、時々ご飯を食べる仲だった。マコの彼氏もまた、モデルかホストみたいに綺麗で目を引く人、とにかく派手で目立つ二人だった。

そんな二人が結婚する事になり、ミクは受け付けを頼まれたのだ。正直見た目には自信がないので、本音を言えばその式に出席する事に多少のプレッシャーも感じたし、恋愛ブランクに陥っていたミクにはなかなかショッキングな話だった。

そんな不安を抱きつつも、結婚式に向けてマコの旦那やその友人達と親睦会が開かれる事になった。

綺麗な子やカッコイイ子ばかりいたら気まづいなあ…そう思いつつも、ミクはその会に参加した。

…そして彼に出会った。

それは親睦会と言う名のコンパみたいな物。

彼一番隅っこが一番奥でミクの前に座っていた。

ほかの男達が自己紹介をしたり、女の子に話しかけて盛り上がる中、

彼だけは寡黙だった。

何だかその態度がやたら不思議でミクの的には始めから彼だけが特別な人に見えたんだけど、それは恋愛感情ではなかったと思う。

何を聞いても微笑んでいるだけの彼を見て、すぐに人見知りなんだなあ……って思った。

だけど、どんな会話にもただ笑顔を浮かべる彼に不思議と悪印象はなかった。

むしろ、ただそこにいるだけ、ただ微笑んでいるだけの彼は、他のよく喋る男達よりずっと安心できてミクは話やすかった。

……でも、ただそれだけ。

その後どうにかこうにかなるとは予想もしていない。

何となく携帯番号を交換してその日は終わった。

そしてぶっちゃけ連絡を取る気もあまりなかった。

だけど、その頃のミクは相当調子に乗った状態で、実は彼の事も「新しい獲物♪」くらいの認識：あわよくば、ご飯おごってもらおう♪

暇な時呼びだそう♪

……くらいの軽いノリしかなかったのです。

だから、好みとかそうじゃないとか関係なく、ミクはとりあえず彼と遊んでみる事にした。

その頃のミクはやたら男にメールしたり連絡する事になれていたから、人見知りの彼を呼び出す事も仲良くなる事も難しくはなかった。自信もあった。

彼の名前は和男。

背が高くて人見知りで細身で何より人見知りな26歳、3歳年上の彼。

そしてミクと和男はドライブに出かけた。

## おかしい流れ

和男とミクの家は時間にすると車で一時間。しかも、高速＋有料道路を使った。

和男とは何度か電話で話していたけど、人見知りの和男はただミクの話に頷くだけ。だからミクのわがままで和男はミクの地元まで来る事になった。

和男はミクの家があまりに遠いので疲れきってしまった。しかも、人混みも嫌い、あてもなく移動するのも嫌い、そんな和男をどこに連れていくかと思いつかず、結局ドライブスルーして、公園で二人で食べた。

ミクは自分から呼び出しておいてさすがに申し訳ない気持ちになり、頑張って喋った。和男は本当にただ微笑んでいるだけなので、ミクは盛り上げようと必死。しかし、人見知りしないミクは、次第に和男に慣れていった。

自分の事を話たがらない和男もミクが話してくれると楽でいいと言ったので、その雰囲気はミクには心地いい物に感じた。

しばらく車で話しているうちにミクは和男に慣れて来た。

この頃のミクは、どこかいつも寂しくて、とにかく自分を甘やかしてくる相手を探していたのかもしれない。そうでなければ密室に二人でいるせいなのか、ミクは和男に対して安心感を感じ始めた。

そして夜も更けてしまい、公園には誰もいなくなった。軽く雨も降って来て車のガラスが白く曇って来た。

外には時々車が通ったけど、二人に気づく人はいなかったと思う。

何だか勝手に安心してうとうとし始めたミクのお腹を和男が触っていた。

それからどちらともなく車の後部座席に移った。

和男の車は大きいので後部座席を倒すと二人でも寝そべる事ができた。

何となく和男の腕が当たったので頭を乗せていたら和男はそのままミクの頭を引き寄せた。

それからしばらく二人は黙ってそのままくっついていた。ただ、何故だか嫌な気が全くせず、その人肌にミクは安心感を抱いていた。

和男だからなのかたまたまそういう気分だったのか…

そしてそのままキスをした。それから静かに二人は体を重ねた。

どちらとも拒否するわけでも、言葉を交わすでもない。それどころかこの展開…あえて言葉は出せなかったのかもしれない。

もちろん二人はお互いに好きなのではない。それは解っていたから、何もきかなかった。

そして和男とミクのろくでもない関係が幕を開けた…。

もちろんこの時点では軽い気持ちだったのだが。

## 終わりの始まり

和男とのいけない関係をミクは楽しんでた。  
まだやっぱり和男を好きなわけではなかった。

どちらかと言えば元カレ大樹を引きずっていると認識していたくらいだ。

だけど、大樹とはうまくいっていなかった。何だかんだ友人関係が長かったから、お互い別れた後も時々連絡を取っていたけど、大樹のそっけない態度にミクは限界を感じ始めていた。

ミクはその頃ある商社の営業所で働いていた。

環境を変えたい一心で転職したその会社は、運悪く性格の悪い営業マンとたったの二人きり…同じビルの中でも年の近い人は居ず、営業マンはだいたい1日留守か居ても嫌味を言ったり、客と喧嘩したり。

話し相手は遠く離れた顔も知らない人ばかりで、ミクはだんだんと孤独な気持ちになって行った…だけど仕事が辞めれるわけでもなく、だからと言ってできるようにもならず、毎日ミスをしては怒鳴られていて、営業マンの顔を見るのも嫌になっていった。

すごく疲れていたし、心の支えがなかった…。

毎日友達を誘ってはご飯を食べに行くものの気は晴れずに、通っていたジムも体がだるくなってやめた。

何もしたくない、誰とも話たくない、それでも何故か仕事をやめられなくて、ミクは病院に行くようになった。

そんな2月のある日、ずっとミクをシカトしていた大樹と久々に電話をした。  
バレンタインデーにチョコを作ったので大樹にあげようと思ったから。

ただ大樹は冗談ばく言った。

「チョコ作ったの！？お前俺の事大好きじゃん」時間もガソリン代  
すらないから取りにいけんけどね」

…。

いつもの悪ふざけのセリフだったと思う。

だけど、何かが音を立てて崩れてく、大樹と出会って、色々な場面で助けてもらってずっと友達で、前の彼がいた時から、もうずっと前から特別だった彼が…

とても子供じみて見えた。

あー死んでくれ！！

心からそう思った。

## 犬と飼い主

2月に入ってから、和男とよく電話をするようになった。大樹の事がふつきれて、だんだんミクの中で和男の存在が大きくなってきていた。

自分でも自覚していた。

和男は相変わらず口数が少なくて控えめだったけど、ミクの話笑笑って聞いてくれたし優しくったから、ミクは嬉しくて毎日電話をかけた。たわいもない話ばかりだったけど、和男は何時間でも付き合ってくれたし、ミクの聞きたい言葉をいくらでも言ってくれた。毎日お昼休みになると電話をくれる、ミクは一人でももう寂しくなかった。

家も遠いし、週に1日しかない休みを男友達との趣味に使っている和男とはなかなか会えない…  
それでも、優しい和男の存在は、ミクにとって大きくて近い物に思えた。  
近くに居ても自分をないがしろにした大樹なんかよりずっとずっとマシだった。

寂しいからなのか…  
他に誰もいないからなのか…

いつしかミクは和男を好きだと思つようになった。

和男にだけは素直に甘えられる、素直に好きだと思える。小さな話題にあいづちをうつてくれて、頑張ったら褒めてくれて、泣いていたら慰めてくれる。

和男との関係はミクの疲れた気持ちを少しづつほぐしてくれた。

二人は犬と飼い主みたいに、寂しい時には体を寄せあつて一緒に寝た。

…だけど、そんな関係は誰も知らない。誰にも言っちゃいけない。

それが何故なのかミクには正直よくわからなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4964d/>

---

かわいい PET

2011年1月16日08時02分発行